

主日礼拝10月30日(日)

題 「宗教改革記念日を覚えて」

テキスト：ペトロの手紙Ⅱ 3章1～7節

皆さん、おはようございます。

明日10月31日は、プロテスタント教会では宗教改革記念日です。そのことを今日の礼拝で覚えたいと思います。

宗教改革記念日とは、ドイツのマルティン・ルターが宗教改革を始めたことを記念する日です。1517年のこの日に、ルターが今のドイツにあるヴィテンベルグ城教会の扉に「95ヶ条の論題」を張り出してスターとしたと言われます。プロテスタント教会の出発です。それまでは、ローマ教皇をトップとする圧倒的にカトリック教会が有力でしたがルターは祈り学び、特に聖書の言葉に聞き、学ぶことによって当時のカトリック教会の有り方を批判しました。

当時のカトリック教会は、『免罪符』を発行していました。これは、この免罪符を買えば天国へ行けるといえるものです。どこか、今の日本での反社会的集団のやり方の匂いがします。

ルターは、カトリック教会の免罪符に対して疑問を持っていたのです。当時の「お金を払えば天国に行ける」かのような、カトリックの在り方を厳しく批判したのです。しかしルターは主張を曲げませんでした。ついにルターはカトリック教会から破門されました。

しかし、ルターの始めた宗教改革は、大きな影響力を持ち、その後ヨーロッパ各地に広がり、イギリスからアメリカ、カナダ、オーストラリアにへと広がりました。ちなみにカトリック教会は宗教改革の影響だと思われませんが、その後、免罪符を廃止しました。

宗教改革の三大原理というものがあります。わたしたちも覚えておきたいと思います。1：聖書のみ。(信仰生活は聖書が中心。)

ルターは当局に取り調べを受けた時、「我はここに立つ」と言ったと伝えられています。聖書のみことばに立つということです。

2：信仰義認(業績ではなく、人間の持っているものではなく信仰によって救われるということ。) 3、万人祭司(教職者と信徒は平等であるということ。教職者と信徒は役割が違うだけ。)

また、お配りした「参考資料」(日本キリスト教団出版局発行、富田正樹著、キリスト教資料集より)をご覧ください。

さて、今日の聖書の小見出しには、「主の来臨の約束」とつけられています。

現代人には理解できにくいですが、これは十字架に死なれ復活されたイエスがやがて再びやって来られるという信仰です。聖書の時の理解には、三つの区切りがあります。神の天地の創造から始まって最後は天地が完成する終末の時「イエス・キリストが再びやって来られる時」、再臨とか来臨とか言われます。そしてその今の時、人間の歴史の時です。これは「中間時」とも言われます。天地創造、中間時、そして救いの完成の時との時の区切り方です。生まれたてのキリストの群れには「マラナタ」と言う言葉が良く使われていたようです。この言葉は「主よ、来てください。」という祈りの言葉なのです。主の来臨、終末の信仰というのは、決して怖いのもではなく、信じる者にはむしろ希望であり願いであり、喜びの信仰なのです。ここから、天に召された愛する人たちとやがて天国で再会できるという生き生きとした信仰も生まれたのだと思えます。

無教会を創立した内村鑑三は、愛する娘ルツさんを天に送った時、その墓碑に「また会う日まで」と書いたことは有名な話です。ちなみに無教会の人たちは聖書を良く読み学んでおられます。

ペトロの手紙が記された当時は、イエスを救い主、キリストと認めない偽教師たちが存在して素朴な信仰者を惑わしていたのです。

ペトロは語っています。

「5:彼らがそのように言うのは、次のことを認めようとしなからず。すなわち、天は大昔から存在し、地は神の言葉によって水を元として、また水によってできたのですが、」と。

「神の言葉」。ヘブライ語の「言葉」には、「思い、意思、計画、出来事」という意味があります。天と地は、神さまの思い、意思、計画によって造られているということです。天地創造は神の愛なる出来事です。しかし、旧約聖書の創世記によれば、人間は神から離れ悪に向かったのです。遂に悪が世界を支配したかのようです。

「6:当時の世界は、その水によって洪水に押し流されて滅んでしまいました。」

これは創世記に記されたノアの大洪水を想像させます。

神が残されたもの以外、すべてが水によって滅んだのです。

しかし、神は世界をノア以後、再生させられました。人類は再出発したのです。その歴史が現在まで続いていることとなります。

創世記をどこか想像の物語、おとぎばなしのようで、科学的にみれば作り話のよう思える時もありましたし、今でも正直ありますが、

しかし、次の7節には、科学や技術、テクノロジー時代に生きるわたしたちの心や胸にリアルに迫って来るものを感じます。

「7:しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、そのままにしておかれるのです。」と。この「火」という言葉が何を指しているのかは分かりませんが、現代に置き換えてみると、この火は地球をも滅ぼす核兵器を始めとする核の時代を暗示しているとも受け取れるのではと私には思えるのです。世界には、すでに地球を破壊するために必要な核兵器は揃っているのです。人類が地球を滅ぼすことがあってはならないことです。

「7:しかし、現在の天と地とは、火で滅ぼされるために、同じ御言葉によって取っておかれ、不信心な者たちが裁かれて滅ぼされる日まで、**そのままにしておかれるのです。**」とあります。 自我に溺れる者は滅びる、驕る者は滅びることは、歴史をみれば教えられることなのです。

神は地を憐み、忍耐してそのままにしておられるのです。

神は、今の時を忍耐しておられるということです。では、わたしたち人間は、これから先どう生きていけばよいのでしょうか？それは人類が悪から離れて、互いに認め合い、大切にシ合って生きていく道を求めるということだと思っております。

ルターは「たとえ明日世界が終りになろうとも、わたしは今日リンゴの木を植える。」と言ったそうです。

わたしたちは、今日の日から新たに、心を静めて聖書のことばにふれる時を持ちたいものです。そして自分自身と、まわりの人々と、世の苦悩を分かち合いながら、神さまの愛の言葉に励まされて、困難な中にあっても主イエスにある希望のともし火を掲げて生きて行きたいと願います。

主の平安を祈ります。